連載　戦時下日本の国策紙芝居研究報告

戦意高揚紙芝居コレクションにみる戦時下用語

―「登場人物編」その２

―現代（昭和前期）前篇―

原田　広（非文字資料研究センター　研究協力者）

今号より、非文字資料研究センターが所蔵する戦時下紙芝居の主要な登場人物（主人公等）を時代毎に取り上げ、関連作品を紹介するとともに、その創作意図や社会的背景等の分析を進めていきたい。本稿「現代（昭和前期）」で対象とする人物は、山本五十六、上田定、岩佐直治、加藤建夫、ハリマオ（谷豊）、飯沼正明、東條英機、橋田邦彦、齋藤辰次郎の９人である。本文中、筆者が所属する旧「戦時下日本の大衆メディア研究班」の研究成果報告書『国策紙芝居からみる日本の戦争』（勉誠出版、2018.2、以下『国策』と略す）から、本班研究員による作品解題を要約・引用させていただいた。紙芝居脚本からの引用部はイタリックで表記する。

1．登場人物と作品：現代（昭和前期）

●山本五十六　1884（明治 17）年４月４日－1943（昭和 18）年４月 18 日

大日本帝国海軍の第 26、27 代連合艦隊司令長官。帝国海軍の偶像であり、戦時下紙芝居中のビッグネームとして、最初に紹介するに相応しい存在であろう。山本五十六を登場させる戦時下紙芝居は、把握の限り、次の４点である。

『英東洋艦隊全滅す』小谷野半二繪畫；日本教育紙芝居協會脚本．日本教育畫劇，1942．01．21

山本を主人公としたものではないが、唯一、生前のものとなった作品。冒頭、太平洋戦争緒戦のマレー沖海戦を（作者による国民感情代弁のかたちで）「*あゝ全く涙が出る程嬉しいぞ*」と無条件に讃え、ハワイ海戦に続く勝利に対して天皇から「*優渥なる勅語を賜った*」指揮官・山本の「*聖恩の宏大に恐懼*」する胸像が左横アングルで描かれている。軍装は、冬季の通常勤務および戦闘時に用いられた濃紺の第一種軍装である。

図1　英東洋艦隊全滅す

『空飛ぶ御盾』小貫武雄作；金子士朗畫．大日本飛行協會，1943．08．31

山本の機上戦死からほぼ４ヵ月後の促成作品。「*昭和 18 年４月 27 日！　連合艦隊司令長官・山本元帥　南海に於て散華。一億の痛嘆きわまりなし。軍神に続け、遺烈をつげ*」「*空飛ぶ御盾となれ*」と少年飛行兵「海鷲」へ馳せ参じるべく檄する。脚本冒頭に山本「*散華*」とあるのみで絵画面の人物描出はない。死亡日付誤りの理由は不明である。出版者の大日本飛行協會は、本作品のほかに『君こそ次の荒鷲だ』1942.06、『敵機を撃て』1943.08 など同趣の作品を発行している。

図2　空飛ぶ御盾

『山本元帥』相澤道郎撰；風間完繪．画劇報国社，1943．11．20

ワシントン―ロンドン軍縮会議による艦船縮減、霞ヶ浦海軍航空隊の訓練、南京渡航爆撃、真珠湾攻撃の指揮といった山本に関わる時系列挿話の末尾に「*思い起こす、昭和十八年五月二十一日―　一億国民の胸に悲憤の血涙を絞らせた大本営発表*」と情報局の死亡公表が記され、「*山本元帥は南海の空から君達を呼んでいる*」と「一人でも多くの少年飛行兵」への志願を呼び掛ける。航空機搭乗員の大量需要が戦局の悪化とともに短期養成へと転

換していく時期に相当する。挿絵画家でもあった風間完は写実性を排した象徴的山本像を置いている。

図3　山本元帥

『山本五十六元帥』鈴木景山謹撰；小谷野半二謹畫．日本教育畫劇，1943．12．15

ハーバード大学留学中の海軍中佐としての振舞いに始まり、紀元2600年奉祝式典を欠席しての首都警備、出陣兵士見送りなどの人格面、地方知事を招いての旗艦長門における先手攻撃演説等、山本の伝説的エピソードが盛り込まれる。鈴木景山による「芝居気ない元帥の逸話を収録した」という冒頭解説のとおり、抑制された脚本と淡色の絵画で戦時下の偉人を描く。日米開戦2年目を機に山本の死を想起させ、時局の再認識、国民的決戦態勢の強化を促す狙いがあったことがうかがわれる（『国策』解題 p.190／原田）。機中の人・山本の第二種軍装について実際は「目立たぬように草色の第三種軍装」だったとの指摘があるが（半藤一利『山本五十六』

図4　山本五十六元帥

平凡社ライブラリー、2011.7、p.418）、小谷野半二の筆は国民的追悼感情と死装束に相応しい「純白」を敢えて選んだというべきか。

●上田　定 1916（大正5）年10月24日－1941（昭和16）年12月8日

●岩佐直治 1915（大正4）年5月6日－1941（昭和16）年12月8日

いずれも海軍軍人。太平洋戦争劈頭の真珠湾攻撃において10人の若者が特殊潜航艇「甲標的」5隻に搭乗員として出撃、米軍の捕虜となった1人を除き9人が戦死した。大本営は1941年12月18日「未帰還の特殊潜航艇5隻」の損害を発表。開戦3ヵ月後の大詔奉戴日に合わせるように、1942年3月6日海軍省から9人の戦死と2階級特進が発表され、新聞等報道は「九軍神」として祀り上げた。

『軍神の母』鈴木紀子脚本；野々口重繪畫．日本教育畫劇，1942．06．10

真珠湾攻撃に参加した、いわゆる「九軍神」のひとりで、特殊潜行艇での攻撃時「われ奇襲に成功せり」の無電を打ったとされる上田定の逸話。中学卒業後、定は上田家初の軍人として海軍に入隊を決意、訝る父と異なり、母はあくまで定の意思を尊重する。海兵団を経て、水雷学校高等科までの各課程を抜群の成績で卒業した定は、昭和16年の秋に三日間の休暇をとり帰郷する。谷川に架かる木橋の修理をする父を手伝った際に冷水に浸かった定は、高熱を出してしまい、くつろぐこともできなかったが、幼い兄弟や母に別れの言葉を告げ、帰って行った。1941年12月8日上田定戦死。上田の母・サクは未だ健気に働いている。（『国策』解題 p.116／富澤）

図5　軍神の母

『軍神岩佐中佐』村田康男，鈴木景山脚本；小谷野半二繪畫．日本教育畫劇，1943．06．05

真珠湾への特殊潜航艇による「*特別攻撃*」で戦死した岩佐直治中佐の伝記。群馬県の農家に生まれ剣道・水泳に秀でた岩佐少年は、前橋中学から海軍兵学校（1938年3月卒業）の訓練を経て海軍少尉に任官。時日を経

て 1941 年秋、深夜に突然帰省し、父母と「*今生の暇乞い*」をする。12 月 8 日開戦の詔勅に「*御奉公の時*」と瞑目する父。1942 年 3 月 6 日大本営・平出大佐が「*捨身の特別攻撃隊の偉業*」を「*護国の華と散った軍神九柱*」と発表。「*今は神となって*」二階級特進した遺影に「*岩佐家の誉れ*」と語り掛ける父母のもとに遺書が届く。1942 年 4 月 8 日日比谷公園の海軍葬に列席し「*喪主拝礼*」で祭壇に進むのは、故海軍中佐・正六位勲六等の母であり、その「*日本の母の清き姿*」に「*烈しい感動が満場をゆすぶる*」。(『国策』解題 p.161 ／原田)

図6　軍神岩佐中佐

●加藤建夫　1903（明治 36）年 9 月 28 日－1942（昭和 17）年 5 月 22 日

太平洋戦争初期、加藤隼戦闘隊の戦隊長として、一式戦闘機「隼」で活躍した陸軍航空部隊を代表するパイロット（中佐、死後少将）。

『空の軍神加藤少將』鈴木景山脚本；小谷野半二繪畫. 日本教育畫劇，1943. 11. 05

『山本五十六元帥』と同じく鈴木景山（脚本）・小谷野半二（絵画）のコンビによる「軍神物語」。真珠湾の特別潜航隊・九軍神の海軍省発表（1942 年 3 月 6 日）に対抗するかのように、陸軍省から「軍神加藤少将戦死」が発表（1942 年 7 月 22 日）されると、各新聞のトップニュース「空の軍神」「軍神加藤少将」「隼戦闘隊長」で全国民の知る伝説的英雄となり、「陸軍航空部隊の至宝」「加藤の前に加藤なく加藤の後に加藤なからん」と惜しまれたという。(『国策』解題 p.182 ／原田)

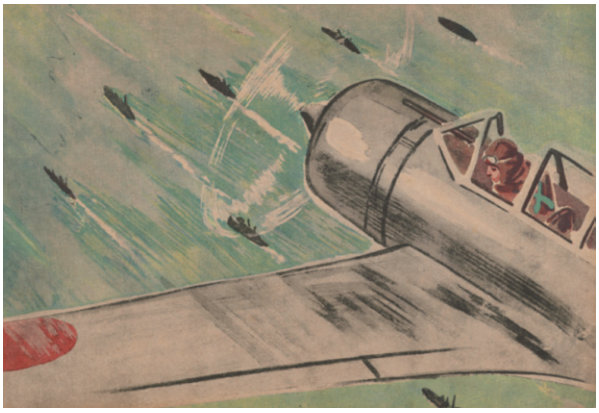

図7　空の軍神加藤少將

●ハリマオ（谷 豊）1911（明治 44）年 11 月 6 日－1942（昭和 17）年 3 月 17 日

昭和初期イギリス領マレーで活動した盗賊「ハリマオ」は、その後日本陸軍の諜報員として活動。マラリアによる死亡も軍属であることから戦士扱いされ、福岡の実家に戦死公報が届けられ、ムスリムながらも靖国神社へ合祀された。

『マレーの虎』和田義臣脚本；西正世志繪畫. 日本教育畫劇，1942. 09. 25

谷豊は、妹静子を三本指の英国人の指示を受けた支那人の暴徒に殺害されて以来、妹の仇をとるために名前をハリマオに変え現地マレー人を率いた盗賊団を結成する。そのなかで日本の特務機関の梶原少佐に出会い、ハリマオの盗賊団の活動は「日本人の体面に泥を塗る」ものと批判される。ハリマオは生活を改め「お国のために」もう一度日本人谷豊として生き直す決心をする。日本軍のために諜報活動や破壊活動を行うなかで、妹の仇と対決の機会を得て復讐を果たしたが自らも重傷を負う。病床の谷のもとへ、谷の活躍を知った母親からお国のために働き靖国神社に祀られることが親孝行であるという手紙が届く。谷は、それまでの活躍が認められて軍属として採用されることとなり、死後は靖国神社へ祀られることとなった。谷は、陥落したシンガポールを眺めながら「天皇陛下万歳」と最期の声を残して死亡した。(『国策』解題 p.126 ／新垣)

図8　マレーの虎

●飯沼正明　1912（大正元）年 8 月 2 日－1941（昭和 16）年 12 月 11 日

戦前日本の民間航空をリードしていた朝日新聞航空部

の一等操縦士。英国ジョージ６世の戴冠式奉祝の親善飛行として計画された東京―パリ間 100 時間内飛行に成功し、世界各国のメディアに取り上げられた。

『『神風』の飯沼正明』十河巖，大内秀邦原作；小谷野半二繪畫．日本教育畫劇，1943．09．20

1937 年、純国産機『神風号』によって東京―ロンドン間の南方空路飛行に成功した朝日新聞航空部員・飯沼正明の物語。1 月 21 日朝日新聞は「亜欧連絡記録大飛行」計画を公表。4 月 6 日午前 2 時立川を出発。台北―安南―印度支那―ハノイ、カルカッタ―カラチ、地中海―アテネ―ローマ―パリ―ロンドンと 15357km の距離を、実飛行時間 51 時間 19 分 23 秒、給油や整備時間を入れた全所要時間 94 時間 17 分 56 秒の記録を達成。国内では「*飛行機操縦と製作技術を４日のうちに世界一流の水準に引き上げた国宝・飯沼*」に感謝する提灯行列が続く。支那事変に伴い報道任務に就き、大東亜戦争が始まると志願して北部マライ戦線へ従軍、1941 年 12 月 11 日「*任務からの帰還中*」に被弾し「*基地で報告後死亡*」する。（『国策』解題 p.176／原田）

図9　『神風』の飯沼正明

●東條英機 1884（明治 17）年 7 月 30 日－1948（昭和 23）年 12 月 23 日）

●橋田邦彦 1882（明治 15）年 3 月 15 日－1945（昭和 20）年 9 月 14 日）

現役軍人のまま第 40 代内閣総理大臣に就任し、在任中に大東亜戦争を開戦した東條英機。生理学者・医学者として高い業績を有し、近衛文麿・東條英機内閣に文部大臣として招聘、敗戦後に A 級戦犯容疑者として指名され服毒自殺をした橋田邦彦。歴史上で果たしたこの二人の「役割」に比して同時代の紙芝居の扱いは小さい。

『總意の進軍』／大政翼贊會宣傳部原作；近藤日出造繪畫．大政翼贊會宣傳部，1942．03．30

開戦直後の翼贊選挙に向けて制作されたプロパガンダ作品。東条が「*大東亜戦争の目的完遂の為に積極的に力を致すべき有為の人材の一人にても多く選出せられんことを熱望する*」と翼贊政治体制協議会（翼協）で発足の挨拶を述べる。

図10　總意の進軍

『宣戰』大政翼贊會宣傳部作；日本寫眞技術化聯盟構成．大政翼贊會宣傳部，1942．12．08

1 年前の対米英開戦を振り返り、アジア解放という戦争目的を提示し、国民の覚悟を訴える作品。開戦同日午後 7 時、東条が日本国民にラジオ放送を通じて行った決意表明「*大東亜戦争開戦の大詔を拝し奉りて*」の場面が、白黒のコラージュで表現される（『国策』解題 p.138／森山）。東条の肉声は「帝国の隆替、東亜の興廃、まさにこの一戦にあり。一億国民が一切を挙げて、国に報い、国に殉ずるの時は今であります」と続くものであった。

図11　宣戰

『敵くだる日まで』和田義臣脚本；西正世志画．日本教育画劇，1943．08．05

老舗の羊羹屋を営む五十がらみの主人は「*必要なものは鉄だ*」と考える長男と家の転業を巡って軋轢を抱えている。店先を掃除中、背後に現れた見覚えのある軍人から「*（長男の）蒸羊羹では戦争はできないとは味のある言葉*」「*日本という看板もこの戦争で下してはならんの*」と声をかけられ、一転して社会的要請に覚醒。店の看板

よりもっと大きな日本という看板のために工場で働くことを決意する。内閣誕生後に東条が市中に繰り出し、市民や子どもに親しく接する姿はしばしば報じられていた。上の二つが戦争指導者・東条を切り出しているのに対して、本作は“大衆政治家”の一面を活用したものである。東条の表情をよく捉えた西の達筆と脚本の単純な「落ち」とのギャップはいささか救いがたい。（なお本作品は、『国策』発行後の調査で発掘されたものである。）

図12　敵くだる日まで

『少年團』西正世志繪画；日本教育紙芝居協會脚本．日本教育畫劇，1942．01．30

太平洋戦争直前の1941年1月16日既存4団体を統合して大日本青少年団が結成。毎月22日に全国一斉の青少年常会を開催し、全国の青少年（国民学校初等科3年から25歳まで）が国家のもとに統制された。12月22日全国の代表が東京に集まり、「*聖恩旗の下、橋田団長の発声で　天にもひびけと叫ぶ　天皇陛下万歳*」を唱えて発会式・市中行進が行われる。熟練の紙芝居画家は珍しく油絵調の濃線で黙々と活動する少年・少女達を描く一方で、文部大臣・橋田は壇上の万歳姿が遠景に捉えられるのみである。

図13　少年團

●齋藤辰次郎 19??－1938（昭和13）年8月13日

群馬県桐生市出身の一陸軍兵士の実話に基づく作品。1938年9月8日付『東京朝日新聞』の報道が大きな反響を呼び、同年11月には「チョコレートと兵隊」と題して映画化、また同名でレコード化された。

『チョコレートと兵隊』國分一太郎脚本；小谷野半二繪画．日本教育画劇，1941．07．15

群馬県桐生市の印刷会社につとめる齋藤辰次郎に招集令状がくる。齋藤一家には妻と長男和夫、長女千恵子がいる。毎日父の活躍をうわさして過ごしていたが、ある日、父から分厚い手紙がくる。そこから手紙とたくさんのチョコレートの包み紙が出てきた。この包み紙の点数を集めて100点になるとチョコレートが一枚もらえると書いてあった。和夫と千恵子はお菓子の会社に手紙を書いて出す。チョコレートが送られてくるのを待ち望む兄と妹。ある日、製菓会社から待望のチョコレートが送られてくる。母子が喜び合っていたその夜、父の戦死の公報が届くのである。喜びから悲しみへの急転。しかし町の人びとや新聞で知った多くの人からの励ましが届き、親子3人は、いつも父が釣りをしていた夜明けの河原に立って、元気な心を取り戻していった。（『国策』解題p.25要約／安田）

図14　チョコレートと兵隊

2.　登場人物（1）現代（昭和前期）の特質

ここまで「登場人物編」連載第2回として、昭和前期（戦時下紙芝居の同時代）に生き死んでいった9人の人物に係る作品を取り上げた。これらの人物を起用することから見えてくる戦時下紙芝居の特質とは如何なるものであろうか。以下三つの観点から分析を行いたい。

（1）描かれなかった政治家（戦争指導者）

これら9人の人物は、国務大臣を除く全員が軍人または軍属であるが、東条英機は陸軍大臣でもあり、敗戦直後に自殺した橋田邦彦もまた、近衛・東条内閣の文部大臣として国民精神総動員運動、皇国史観の普及に深く関与している。戦時下紙芝居から大東亜戦争遂行の戦時

色を免れ得る人物をほかに選ぶ余地はほぼあり得なかったといってよい。

しかし、戦時下紙芝居のなかに、日本の歴代内閣の首長（伊藤博文、桂太郎等をふくめて）を作品の“主人公”とするものは一作も存在しないのである。前号末尾の人物一覧に見るように「政治家」そのものが相対的に少なく、登場したとしても作品の時代背景や人物関係を示すための一場面として描かれるに過ぎない。その理由として考えられることは、目前の政治・行政に携わる人物の世俗性、換言すれば“ものがたり”を成立させるために必要な外部の欠如ということであろう。非命の死や世界的名声といった観客との到達不能の距離は、作品の主人公を形象するに必須の重要な条件なのである。東条も、前任の近衛文麿もまた青年宰相として大衆的人気を獲得していたにもかかわらず、同時代作品の主人公となる資格（神話性というべきか）を欠いていたというべきであろう。あるいはまた、紙芝居という大衆メディアの位置から政治的空間を描くことへの禁忌意識が存在したであろうことも考えられるところである。

戦時下紙芝居に登場する同時代の主要な政治的指導者は、「敵の顔」を典型的に象徴するルーズベルト、チャーチル、蔣介石の３人のみであり、ヒトラー、ムッソリーニという三国同盟の領袖も深く描き込まれることはない（この点は、登場人物「外国人」の項で触れる予定である）。戦時下紙芝居が、戦争指導者を浮き彫りにするかたちで取り上げることがなかったこと―いわば決定的な他者性の欠如―それは、日中戦争から大東亜戦争へと拡大した総力戦体制下の国民精神統合に大きな役割を果たした『国体の本義』1937.03、『臣民の道』1941.07、そして文部大臣・橋田邦彦のもとで編纂された『国史概説』1943.03 の閉鎖的皇国史観に通底するものであろう。蔣介石の名前が『国体』『臣民』の両書にただ一か所だけ挙げられるが、それも「支那事変は、我が国による道義的世界建設の途上に於ける世界史的一段階であるがゆえに、蔣介石政権の打倒を以って終わるべきものではない」という文脈で現れるのみである。他者性を欠いた戦時下紙芝居の人物起用・描写は、それが皇国史観による独善的な聖戦イデオロギーに深く潤色されたものであったことを物語る。

(2) 多様なメディアへの同時表出

上に取り上げた紙芝居作品で描かれた“ものがたり”は、さまざまなる戦死者への追悼感情と登場人物の生前逸話を複合させた諸報道をとおして、大きな社会的反響を呼び起こしたといわれる。実質的に「軍神」扱いされた者を含む彼らの“ものがたり”は、小説・映画・演劇・音楽・紙芝居等の各種メディアによって増幅（メディアミックス）され、ある場合は無名の兵士を一時代の国民的英雄に祀りあげた。代表的な例を下記に示そう。

●**チョコレートと兵隊**：1938 年９月に東京朝日新聞に紹介された慰問袋が結ぶ父子の美談は、1938 年 11 月に映画化、翌 12 月にタイヘイ・ビクター両社にてレコード化（作詞・サトウハチロー、作曲・竹岡信幸、唄・霧島昇）され、1939 年６月には同名の国策紙芝居が日本教育紙芝居協会から発行された（本センター所蔵とは異作）。映画「チョコレートと兵隊」は製作＝東宝映画（東京撮影所）、原作＝小林勝、演出＝佐藤武、脚本＝鈴木紀子である。鈴木はこの後『安南の浦島』『キューリー夫人伝』『軍神の母』等の紙芝居作家として活躍する。映画化に際しては「齋藤」が「齋木」へ変更されつつも、一家の住まいは実際の栃木県桐生に設定され、渡良瀬川の河岸と鉄橋が映っている。映画の複製版は第二次世界大戦開始直後に映画監督フランク・キャプラと文化人類学者ルース・ベネディクトの手に渡り、日本人の戦中心理を研究するための資料とされた。明治製菓を後援者にした紙芝居『チョコレートと兵隊』の成功は、印刷紙芝居飛躍のきっかけかとなったといわれている。

図15　東宝映画「チョコレートと兵隊」

●**『神風』の飯沼正明**：朝日新聞航空部員・飯沼正明と機関士・塚越賢爾が挑んだ「亜欧連絡記録大飛行」計画に、朝日が社運をかけて「神風号」を飛ばせた背景には、東京日日新聞、大阪毎日新聞（ともにのちの毎日系）との熾烈な部数競争があったとされる。飛行時間当て懸賞には新聞発行部数の２倍を超える応募があり、結果として朝日新聞は発行部数を大きく伸ばすことになった。

神風号のルート（『神風画報』第１集より）

図16　『神風画報：亜欧記録大飛行』

朝日新聞は本企画の記録として『神風画報：亜欧記録大飛行』全２輯を発行している。飯沼の成功記録は、日本の航空操縦技術と製造技術を世界最高レベルの評価に高め、国を挙げての壮挙として日本国中をわき立たせた。戦時下紙芝居の伝記パターンを構成する「世界に比肩する日本人逸話」の一つでもある。コロムビアから「遂げたり神風」（作詞・北原白秋、作曲Ａ面：山田 耕筰、Ｂ面：村山美知子）のレコードが出されている。朝日新聞初代社主の孫・村山美知子の飯沼への深い思い入れが刻まれたＢ面の方が大衆的に幅広く受容・継承されたといえよう。

●**空の軍神加藤少将**：陸軍戦闘機「隼」の操縦者・加藤建夫の戦死（1942 年５月 22 日）は、陸軍省から正式に「軍神加藤少将戦死」と国民に向けて発表（7 月 22 日）されると、23 日付の各新聞では一面トップ・ニュースとして扱われる。『写真週報』も「噫々軍神 加藤建夫少将」「双葉より神鷲の面影」（8 月５日号）、「敵空軍恐怖の的 隼」（9 月 16 日号）と特集するなど連日大々的に扱われた。これによって、加藤は「空の軍神」「軍神加藤少将」「隼戦闘隊長」として全国民の知る伝説的英雄となり、「隼」は太平洋戦争中の日本軍戦闘機の中でも最も有名な戦闘機として知られることになった。早くも 1942 年９月には加藤を讃える国民歌謡「空の軍神」（作詞・西条八十、作曲・古関裕而、唄・藤山一郎）が大ヒットし、1944 年陸軍記念日の前日（3 月９日）には陸軍省後援・情報局選定の東宝映画『加藤隼戦闘隊』（監督＝山本嘉次郎、特殊技術＝円谷英二、主演＝藤田進）が公開された。

図17 『写真週報』（1942 年８月５日号）

●**同時代の小説**：近代国家間の大規模な戦争は、多くの戦記作家や戦争文学者を生み出している。我が国最初の近代戦・日清戦争においては、国定教科書にも掲載された「水兵の母」に題材を提供した異能の軍人作家・小笠原長生があり、日露戦争では『銃後』『肉弾』の櫻井忠温が、そして日中戦争以後では火野葦平の兵隊三部作が大衆的読者を獲得してきただろう。本稿に関連するところでは、山本五十六の伝記が 1943～1945 年に約 30 点以上確認できるし（国立国会図書館サーチ）、軍神加藤建夫、後述するアッツ島の山崎軍神部隊関連も少なくないが、ここでは同時代の小説家による以下の３作品を取り上げたい。

・**坂口安吾「真珠」**：文芸雑誌『文藝』第 10 巻第６号（1942 年６月１日）に掲載。上記真珠湾の「九軍神」の海軍葬から２カ月後という早い時期に発表された中堅作家による短編小説である。特定の人物をモデルにするのではなく「あなた方は九人であった」、極秘裏の「几帳面な訓練」のほかに余念なき数か月の行く手には「万死のみあって」「あなた方のあらゆる無意識の隅々に至るまで生還の二字が綺麗に拭きとられていた」「あなた方はまだ三十に充たない若さであったが……あなた方は、自分の手で真珠の玉と砕けることが予定された道であった」と呼び掛ける。「生還の二字を忘れたとき、あなた方は死も忘れた。まったく、あなた方は遠足に行ってしまったのである」と結ばれる。（奥野健男監修『太平洋戦争：兵士と市民の記録』集英社文庫、1995 年６月 25 日、所収 pp. 91～107）

・**岩田豊雄「海軍」**：獅子文六のペンネームではなく本名で 1942 年７～12 月朝日新聞に連載。真珠湾攻撃において５隻の特殊潜航艇の先頭で突撃した横山正治中尉（死後少佐。同乗は上掲紙芝居『軍神の母』の上田定）の誕生から 23 歳の死までを綴った中編小説である。作品中に横山は谷真人として登場し、同郷の友人で海軍画家（軍属）となる牟田口隆夫との友情、その妹・エダとの恋愛模様が物語られる。真珠湾突撃の模様は、最終章近く、1942 年３月になって初めて戦死を知った日の夜に隆夫が見た夢として描かれる。隆夫は谷（横山）の潜水艦に乗っており「一体ここはどこな？」と尋ねるが、谷が「水のような冷静な表情」で部下に艇の降下命令して数時間後、「よし、時間だ」と立ち上がり「てーッ！　（撃て）」の号令と短い沈黙とともに水中が渦巻くような轟音。「隆夫、喜べよ―アリゾナ型をやった」と満面に喜色を浮かべる谷、隆夫が躍上がって飛びつこうとすると「待て。軍人は、報告を済まさんと、任務が完了せんでなァ」と静かに無電台の前に座った。この部分は、日本側の記録に横山・上田艇から「われ奇襲に成功せり」の電文があったことを承けているものであろう。最終章は、隆夫と妹エダが海軍葬に出席し、そのまま郷里・鹿児島に戻るという妹を東京駅に送る場面で閉じられている。（『海軍』新潮文庫、1962 年８月５日）

安吾の「まったく、あなた方は遠足に行ってしまったのである」の結語には、10 名の海軍士官が緘黙のうちに出征死した事実を、時空を隔てて聞き及び、やがて銃後国民総体を襲ったであろう粛然たる心境がうかがわれる。小説「真珠」では、文中「『お弁当を持ったり、サイダーを持ったり、チョコレートまで貰ってまるで遠足

に行くようだ』とあなた方は勇んで艇に乗り込んだ。然し、出陣の挨拶に、行ってきます、とは言わなかった。ただ、征きます、と言ったのみ。そうして、あなた方は真珠湾をめざして、一路水中に姿を没した」と描かれる。この同じエピソードが、岩田豊雄『海軍』では「サイダーやチョコレートを持って、まるでハイキングに行くようだ―と言った若い士官は誰のことか分からないが、九軍神の若々しい、そして揺るぎない、澄み渡った気持ちを、代表しているように、思われた」とある。この逸話を残したのは、特殊潜航艇「甲標的」艇長・広尾彰であったという（佐々木半九、今和泉喜次郎『決戦特殊潜航艇』朝日ソノラマ、1984年9月10日、p.105）。九軍神の発表後の夥しい取材報道が、国民間に広く共有されていたことを物語っている。まだうら若い（むしろ稚い）海軍士官の出征と生還を期さない壮絶な決意は、彼らが地方出身の無名戦士であっただけに、「遠足・ハイキングに出かけたまま戻ってこない子供たち」のイメージ一点に昇華することで辛うじて国民各層に受止められたといえるのかもしれない。

・**太宰治「散華」**―『新若人』第5巻第3号（1944年3月1日）に発表、『佳日』1944年8月20日肇書房収録。1943年5月30日「アッツ島守備隊全滅」の大本営発表があり、そのなかで初めて「玉砕」の表現が使われた。部隊全滅のちょうど3ヵ月後の8月29日には山崎部隊長と部隊に感状が出されたことが報じられる。本作は、すでに文壇で確固たる地位を占めていた太宰が、アッツ島で戦死した若き知人を偲んでその数か月後に発表した短編小説である。書き出しの名手と評価される太宰らしい作品冒頭―「玉砕という題にするつもりで原稿用紙に、玉砕と書いてみたが、それはあまりに美しい言葉で、私の下手な小説などには、もったいない気がして来て、玉砕の文字を消し、題を散華と改めた」に続けて、本作品のモデルを紹介する―「ことし、私は二人の友人と別れた。早春に三井君が死んだ」「もうひとり、やはり私の年少の友人、三田循司君は、ことしの五月、ずば抜けて美しく玉砕した。三田君の場合は、散華という言葉もなお色あせて感ぜられる。北方の一孤島に於いて見事に玉砕し、護国の神となられた」。小説家志向であった三井君は、自分の疾患（結核か）をなおす気がないまま「うらうらと晴れて、まったく少しも風のない晴れの日に……桜の花が花自身の重さに耐えかねる」かのように死んだ。「私は三井君を、神のよほどの寵児だったのではなかろうか」「人間の最高の栄冠は、美しい臨終以外のものではないと思った」と言葉を寄せる。もう一人の「二十六、七歳くらいの友人」三田循司は「先輩の篤実な文学者・山岸さん（山岸外史か）」にも評価される詩人であったが、1942年2月盛岡の歩兵百五連隊に入営、10月末北海守備隊に転属。（太宰はそれを知らず）「ことしの五月の末に、私はアッツ島の玉砕をラジオで聞いたが、まさか三田君が、その玉砕の神の一柱であろうなどとは思い設けなかった。三田君が、どこで戦っているのか、それさえ私たちには、わかっていなかったのである」「あれは、八月の末であったか、アッツ玉砕の二千有余柱の神々のお名前が新聞に出ていて、私は、その列記せられてあるお名前を順々に、ひどくていねいに見て行って、やがて三田循司という姓名を見つけた」のである。「北海道派遣××部隊」に所属する生前の三田から届いた最後の手紙がひかれる―「御元気ですか。／遠い空から御伺いします。／無事、任地に着きました。／大いなる文学のために、／死んで下さい。／自分も死にます、／この戦争のために」。〈文学の無償性〉に生涯を賭した太宰は、太平洋戦争末期のこの時期にはやがて35歳になろうとしていたが「私は、最後の一通を受け取ったときの感動を書きたかったのである」と執筆の動機を記している―「死んで下さい、というその三田君の一言が、私には、なんとも尊く、ありがたく、うれしくて、たまらなかったのだ。これこそは、日本一の男児でなければ言えない言葉だと思った」「純粋の献身を、人の世の最も美しいものとしてあこがれ努力している事に於いては、兵士も、また詩人も、あるいは私のような巷の作家も、違ったところは無いのである」と。そして、三田の遺稿集の刊行を山岸、三田の弟と相談するのである。（『太宰治全集6』ちくま文庫、1989年2月28日、pp.239～256）

ここに紹介した3人の小説家の掌編は、圧倒的な戦時報道の氾濫のもとで、戦時下国民がふと自らの胸のうちを覗き込んだときに聞こえる密やかな沈黙を伝えてくるであろう。それは、戦時下紙芝居の国策同調的な「雄弁さ」と、表現の核において次元を隔絶した対比をなしているように思われる。

登場人物編第2回「現代（昭和前期）」は、誌面の都合で、前・後篇に分けて掲載することとなった。次号（第3回）では、登場人物編「現代（昭和前期）」の特質の続きとして、「(3) 偶像化された軍人・軍神」について分析・報告する予定である。